

堺市の生物多様性にふれる冊子

堺いさものの通信



ハンミョウ



サンコウチョウ

2024 春 号

堺にすむ

いきものたち



ヒレンジャク



ヒメコガネ



オオヒラベツコウマイマイ



シマギ



ニホンカナヘビ



ダイミョウセセリ



ヘビイチゴ



ニクウチワタケ



シュレーゲルアオガエル



ゴマダラカミキリ



キンラン

生物多様性とは、単に動物や植物の種類が多いということだけを意味するものではありません。地球上では、様々な環境の中で多様な生き物が食べる・食べられる・共生するなど、お互いにつながりをもって生きています。このように、多様な生き物がお互いにつながりをもって生きていることを生物多様性といいます。

ここでご紹介する写真は、すべて堺市内で撮影された写真です。WEBサイト「堺いきもの情報館」に市民の方などからご投稿いただきました。個性豊かな生き物たちや彼らのすみかを見て・知って生物多様性を感じてみてください。
生物多様性とは身近なものなんですよ！

い
もっと もの知りになれる！
生物多様性のおはなし

- 横のつながり -

前号では、食物連鎖についてお話ししました。これまで食物連鎖をはじめとする栄養関係に基づき、生物多様性の研究が行われていましたが、非栄養関係も生物多様性を形作る上で、同様に重要な役割を担っていることが明らかになってきました。「食う・食われる」という食物連鎖に基づく生き物の縦のつながりは、無数に存在しており、一見それらは関連のないように思えるかもしれませんが、それらをつなぎ合わせる、非栄養的な横のつながりが存在しています。今回は、北海道に生息している、ヤナギとその葉に集まる昆虫たちを例にして、生き物の横のつながりを紹介します。生物多様性の奥深さ、魅力に触れてみてください。

このヤナギの葉は、アワフキ、ハマキガ、ハムシの3種の昆虫に捕食されており、3つの独立した生き物の縦のつながりが存在しています。夏になるとアワフキはヤナギの枝に卵を産みます。卵が産み付けられた枝は枯れてしまうのですが、翌春には、新たにたくさんの枝が伸び始めます（この現象を補償成長といいます）。新しい枝についた柔らかい新葉は、ハマキガの幼虫の格好の住みかになるため、より多くの幼虫が集まるようになります。夏にハマキガの幼虫がこの住みかを去った後には、アブラムシがこの住みかを再利用するために集まるようになります。その後、アブラムシが作る甘露を目当てにアリが姿を見せるようになり、アリはアブラムシを守るために、葉に集まるハムシなどの他の昆虫を追い払います（この関係を相利共生といいます）。まとめると、ヤナギの補償成長がきっかけとなり、その葉に集まる昆虫たちの間に、新たに非栄養的な横のつながりが生まれ、最終的にはアブラムシとアリの相利共生がヤナギの葉に生まれました。

生物多様性とは、多様な生き物が存在することだけでなく、多様な生き物がつながりを持って暮らしていることを意味します。今回はヤナギとそこに集まる昆虫を例にしましたが、同様の関係性は自然界に無数に存在することが示唆されています。生物多様性とはとても複雑ですが、それ故に魅力的でもあります。生物多様性の魅力、実感いただけましたか。

参考：<https://eco.kyoto-u.ac.jp/?p=646>



《編集・発行》

堺市環境局 環境保全部 環境共生課

TEL：072-228-7440 / FAX：072-228-7317

E-mail：kankyo@city.sakai.lg.jp

ユーザーネーム
sakai_ikimono /



WEBサイト
トップページ



Instagram
アカウント